

是に由つて十分発展せられなかつたカントの意識の総合的構造の説(図式論や第一版の先験演繹論に現るる如き)が、先験意識の本質的観照の立場から新なる光に照らされる。併、フッセルの先験意識とカントの先験は対象の客観性を根拠付ける為に現実意識が実現すべき規範として、謂わば現実意識の彼岸に想定せられる規範意識である。然るにフッセルの先験意識は現実意識の含む超越的对象への関係を内在化し、現実意識を謂わばその彼岸にある統一的根柢に還元したものである。此処に両者の根本の相違がある。而してそれに関連して更に次の如き対立が生ずる。カントの先験意識は所与の真観に客観的意味象たる資格を賦与する為の論理的合理化の形式を、単に意識の総合的統一即ち所謂先験的統覚の中心に統一したものであるから、主として形式的に止まり、所与の資料に外から指定せられた規範的形式という意味を脱しないのに対し、フッセルの先験意識は現実意識をそのまま其内在的方向に還元したものであるから、それは単なる形式的統一といふべきものでなく現実意識の最下底たる感性的質料を含み、所謂質料と作用とを貫きて意識の構造を本質的に観ることを能くせしめる。斯くて形式が

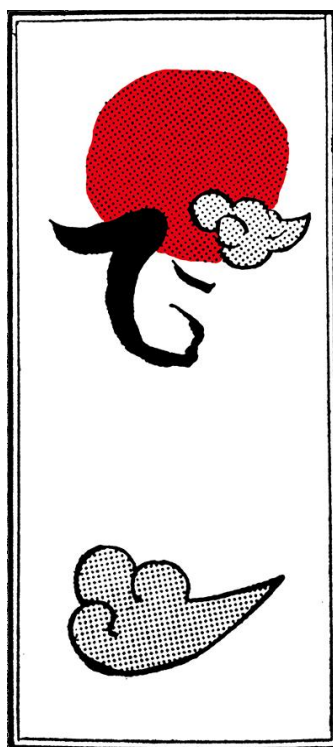
古事記

天地の初発のとき

—西洋哲学—(八)

反省的方法—

竹葉 秀雄



第 65 号  
 月 | 回 発 行  
 ひの心を継ぐ会  
 〒799-1336  
 住所:愛媛県西条市  
 上市甲 720-1  
 TEL:080-2986-0856

綱 領

- 私達は明德を明らかにします
- 私達は国家の鎮護となります
- 私達は大和世界を建設します

外から指定せられたものでなく、規範の権能が単に要請に止まるものでなく、質量と相即し現実を基底とするという内面的連関が生ずる。此処にカントの形式主義の上に出ずる現象学の具体性がある。所謂「事象自体へ」が現象学の標語となる所以である。意識の最下底から先験的自我の極を媒介にして作用が基底付けの關係に由り総合せられて、それに対応する対象領域を構成する構造關係を明にし、客観界を夫々の領域として成立せしむる統一根柢として原始領域としての先験的意識を考えるのが、現象学の特色といふべきである。

## 農士道

## 第六章 日本農道の本義

## 第二節 仕事の精神

## 仕事とは何か

仕事とは何ぞや。——日本精神の真髓たる「仕」の一念を以て事に当るをいうのである。其の職業職分の如何を問わず、吾等大和の国の「ひの本」民族は、此の一念——没我奉仕の一念を以て、其の事に当って来たのである。日常「田に仕事に行く」「畑に仕事に行く」など無造作の間に使い慣らして来たこの「仕事」という言葉に、深く玩味すれば実に斯くの如く敬虔なる日本精神の真髓を発見し得るのである。

田に仕事に行く！

畑に仕事に行く！

山に仕事に行く！

田に、畑に行つて勤勞することを、吾等「ひの本」民族は、実に「仕事」をすると哲學し、信仰し、而して実行して来たのである。従つてそれは断じて単なる「労役」ではない。恰も忠臣が君に仕うる如く、孝子が親に仕うる如く、貞婦が夫に仕うる如く、己の一切を捧げ尽して没我奉仕する「ひの本」精神を以て田に畑に仕うるのである。可憐な乙女子が針を運ぶことすら、それは単なる裁縫——裁つて縫うとはいわずして、其の衣縫う「針の道」を通じて親に、夫に、子に仕えんとする「針仕事」と観じて来たのである。

すめらみくにのものは

如何なる事をつとむべき

ただ身にもてるまごころを

君と親とに尽すまで

黒田藩の俊傑加藤司書が、いみじくも唱破したこの今様歌こそは、日本武士の莊嚴たぐいなき「仕」の精神を明示せるもの、苟も日本農士として、日本国土に奉仕せんとする者に、亦此の至誠を以て仕うる所がなければならぬ。祖神の靈の宿ります瑞穂国の大地に打ち込む一鍬々に籠むる力！そは決して一日労働すれば

## 菅原 兵治

何十銭の労銀を獲得する為のみの故に働くのだという様な、労働商品說的な努力とは、霄壤天地の差ある聖なる労働である。——是れ実に日本精神の職業的顯現にして、「仕事する」真精神は実に此処に在らねばならぬのである。

今之を農業的に更に深く考察するに、農業という仕事を「本」の原理と末の原理の両面より見れば如何になるか。一応之を究むる必要がある。前述の通り「ひの末」原理はすべてのものを分裂的、対立的に見る所から、農業上に於ても、「人間」と「土地」とを亦対立的に分裂して見て、「人間」が「土地」を征服して、これより成るべく多くの利益を獲得し——極言すれば搾取せんと考える様になる。之に対して「本」の原理に立つて考うれば、すべてのものを総合的大和的に見、随つて「他」と対立せる「我」を主張して我執排他に出ずることを戒むるが故に、「人間」と「土地」とを対立的に考うる事をせず、「人間」が「土地」に没我奉仕して——嚴密に言えば、仏家の所謂「入我我入」の教の如く、人間が土地の中に没我し、土地が亦人間の中に没我する一体大和の境地に至つて至誠勤勞するという事になる。かかる観点より東西両思想に就いて、その農業の定義を検討して見ると、其の間に截然たる相違あることを発見することが出来る。

## 逆境からの出発

三浦夏南

君臣父子の関係を中核とする五倫五常の道は、人倫の大経であり、人類の常道であると古人は断言したが、この道が当為当然、平易凡庸なものとはとても思えないほど、道義の教学は忘却され、人倫の事実は消失している。周囲を見渡して見るが良い、父子は祖先伝来の家業を継承し、常に協働して生活を営んでいる親子は何処にあるか。父は我が国の所有であるかすら疑わしい大企業の中で使役され、子は数年毎に所を変えざるを得ない運命にある公務員によって、学校とやらに養育されつつある。男女の厳格なるはじめは何処へ行ったか。男がしていることを女もするというのが、本当に女性の権利だと思つて居るのなら、錯誤も甚だしいと言わざるを得ない。女性にしか出来ない本来の使命、出産や子育てをこそ権利として主張すべきであるし、伝統的に女性が担つて来た料理洗濯と言つた家事の重性や神聖さを強調すべきである。その他君臣、長幼、朋友の關係に至るまで、人倫が退廃しているというよりも、人倫という概念すら存在しないかの如き現状が当然のように巷間に溢れかえっている。

勿論斯くの如き現象は有志以来未曾有の危機というに相違はなからうけれども、顧みて我が国の戦国の有様を概観すれば、戦乱の世に割拠した群雄達も、現代に勝るとも劣らぬ逆境の中から這い上がつて来たことが理解される。例えば毛利一族の如き、西には巨万の富を築き、其の榮華は京都を超えたとまで言われた山口の大内氏が蟠踞し、東には源氏から出た京極氏の分家で巨大な勢力を誇る尼子氏が睨みをきかせている。斯くの如く二大巨族の中間に挟まれて、道義の衰えた戦国の世に一族の団結と生存を守り抜くことが如何に難しいか、戦国の世を去ること遠い令和に生きる我々にも容易に想像されることである。一族家臣の中にも或いは大内に通じ、或いは尼子につくものが現れるのは当然であるし、毛利一族の世襲問題に大内、尼子の思惑が働くのも当然である。斯くの如き容易ならぬ状態でありながら、毛利家の次男に生まれ、父、兄、嫡孫を続けて失い、一族内の問題多出する中で、一族に統一を齎し、内には秩序を確立し、外には謀略を用い

て一族の權益を確保した毛利元就に驚嘆せざるを得ないのである。

徳川の形勢を見ても同じである。西には織田、東には今川という巨大な敵に挟まれ、織田と今川の葛藤がそのまま松平一族の内乱に直結する。或者は織田に通じ、また或者は今川の援護を頼み、一族の思いが分断されれば、分家や家臣の不満の矛先は惣領家へと向けられる。斯くの如き対立葛藤から、家康の祖父も殺され、父も殺され、幼くして残された家康は今川の人質として其の人生を出発させたのである。まさに内憂外患交々至る、何という逆境であろうか。信頼すべき譜代の分家家臣は頼るべくもなく、親しく惣領家の主人としての生き方を学ぶべき祖父や父もいない。ここから家康が松平を統一し、織田信長と提携して、東海はおろか天下の経綸にまで至つたとは俄かには信じ難いほどである。

英雄はこれほどの逆境に於かれてさえも、一念発起、鋼鉄の如き信念を以て一族を統一し、群雄と闘争し、天下国家の大事にまでも踏み至つたのである。戦国の英雄の如き人徳英才を自己に見出すことは難しいが、同じ日本人として、彼らが為したことの万分の一でも、この世に行くことが出来るならば、回天の事業を成すことが出来る筈である。歴史に学び、歴史に励まされ、我々もまたこの乱世に志を打ち立てたいと思うのである。

## 志について

三浦 颯

今年からの取り組みで、会員の寄稿文を掲載していくという運びとなり、月号ではいつも裏方の仕事を務める私も文章を書かせて頂くことになりました。思えば、学問に志を立て、日本人として懸命に生きていこうと決断したのも、ひの心を継ぐ会を発足した少し前のことで、私の愛国運動は当会と共に始まりました。その中で様々な思想の変遷や、行動による経験等がありました。何年経っても「志」というものが結局のところ一番大切であると感じています。

「志」という言葉に関して何かしら書かれている文章は星の数ほどありますが、その中でも特に心に残った先哲の説明を鑑みるに、「志」とは「心差し」であり、「士(さむらい)の心」のことであると考えています。換言すると、自らの心をどこに向けてのか、延いては自らの人生をどこに捧げていくのかというのが「志」であり、その「志」は須らく「士の心」で以て定めていかなければならないということです。『農士道』の著者である菅原兵治先生は「士」は「十」と「一」との会意文字であるとされている。『十』は数多き欲求群を指している。…而して此の『十』なる欲求群をよく統制し規格して、生活に礼あらしめて行く統一原理——三軍の帥に当る『志』を『一』を以て現わすのである。」と言われているように、その志は数多き人の欲を、一つの公明正大な精神によって統制するものなのです。一人の神州男児として生まれたからには、そんな志を抱き人生を終わりたいものなのです。

しかしながら、昨今は「好きな事をして生きていく」ということが美徳化され、多くの大人と子供が自らのエゴとしての欲求を充足せんが為に奔走している姿が見受けられます。志とエゴがイコール化されつつあるのです。不労所得で早期リタイア(FIRE)する人々を勝ち組と称賛し、エンタメ系 YouTuber に代表されるような、いわゆる「お遊びの延長線上」で成金となつてふんぞり返る若者たちに憧れを抱く、まさに愚の骨頂のようなものが世の中のモラルハザードを招いています。仕事に関して、コンサルタントの類のお口ばかりの仕事で溢れかえり、中抜き業者が下請け業者に発注を繰り返すだけで、実労働を伴わないものが多くを占めています。一方で国を支える第一次産業は衰退の一途を辿り、現場労働者は低賃金

の自転車操業を余儀なくされ、その穴埋めとして技能実習制度を悪用した外国人労働者を用いることに何のためらいもありません。道義国家「日本」は何処にありや、という有様です。畢竟、現代社会においては欲の充足が肯定され、公の精神や社会貢献なども経費に算入されているだけで、実質は利己的営利活動を脱し得ないのです。そして、より利益を獲得するために、農家よりも青果会社が儲かる、大工よりも建設会社が儲かる、そんな青果会社や建設会社にアドバイスするようなノーリスクのコンサルタントの方が儲かる、というふうな構図になっており、肉體労働から知的労働へ、実質から「Enjoy」に移行することでマネーが加速的に増えていく仕組みになっています。そんな実質の無い空虚な張りぼて社会で、如何なる「志」が立てられるのでしょうか。

根腐れしている野菜に健全な成長が望めないように、健全な志は健全な社会を必要とします。一部の少数人が志を立てるのであれば、どのような逆境でも立志できるかもしれませんが、多くの民が正しい方向に向かうためには、やはり社会自体がそういった環境でないと難しいものです。その社会を再建していくことが、私の愛国運動であり、私の志となっています。「農は国家の大本」と言われるように、農は生活の本であり、教育の本でもあります。この農を取り戻していくことが急務なのです。この大地に根差した生き方に還らなければ、皆が理想としている社会に成りえないことを何年も学問する中で痛感しています。農本主義的価値観に戻れば、自らの生活は自ずと田畑や家に結びつき、それを支える土台としての地域と結びつき、それが発展して村や国と自然な形で結びつくことができます。そうすることで公に対する責任感も生じて来るのです。また生活は衣食住を中心に展開され、実質の労働が大半を占めるようになります。その中で倫理道徳が涵養され、道義的国家が変わっていくのです。そんな社会を再建する為に、私は百姓になったのです。自分の人生をラクにエゴに生きていくだけでよかったですら、私も百姓になってわざわざ汗水流して、お金に困りながらあくせくする必要もなかったのです。社会と折り合いを付けながら、現状をある程度肯定しつつも、批判するという賢い生き方もあったかもしれません。しかし、そんな半端な生き方ではこの世の中を変えていけるような主体者には成りえません。それを自らが体験し、自らが再建していく主体者となるために百姓になったのです。今、空虚なマネーベ-

又の社会から実質の衣食住ベースの社会へ、資本主義社会から農本主義社会へ移って行く時が来ている。私も一人の神州男児として、この世に生を享けたからには、やはり「志」に生き、「志」に死にたいものです。そんな志を共有できる若人と日本再建に向けて奔り続けたいと思っています。

### 小野鶴山の『大学師説』⑥

庄 宏樹

知止而后有定。定而后能静。静而后能安。安而后能虑。虑而后能得。止まりを知りて后定まることあり。定まりて后能く静かなり。静かにして后能く安し。安くして后能く慮る。慮りて后能く得。

さて、そのような明德の極至すなわち堯舜のような境地こそ、人たるものの目指すべき境地であるということを知れば、自ずと心に一定の志向性が出てくる。このことを述べたのが、経文にある「止まりを知りて后定まることあり」という言葉である。鶴山は、この箇所を講義して次のように言う。

江戸へゆくは東へゆいて、さて五十三次を歴てゆくと云を知らればこそゆるる。それを北へゆかふか、西へ行かふかと云様なことでは、百年かゝりても本路にはゆきはせぬぞ。親に事るの孝はケ様くが本法、君に事るはケ様くと知るのでこそ、心が其方へ真向に向ふてくるぞ。それで「知止」が一番の手の下し処ぞ。

「知止」は、一般的には「止まるを知る」と読み下されるが、崎門学ではこれを「止まりを知る」と読んでいる。細かな違いのようであるが、「止まるを知る」と読んでしまうと、既に至善の境地を体得したという意味になり、後の「慮りて后能く得」との差が見えづらくなってしまふ。鶴山の言うように、「知止」とは「一番の手の下し処」であって、修行を始めるにあたっては何を終着点とし、そのためにどのような方向を目指すべきかをまずは知る必要がある、ということなのである。では、「慮りて后能く得」とはどういうことか。

能の字は、いきにくいこと、自由自在に手に入らぬ事、得は学者一生の目あてで、我身とともに身のものになり得たこと。誰もかふなりたいものなれども、かりそめになることでない。……慮は、致知の功を積んできて、義理の見えるなりが節尽して、心の回ることぞ。義理みがいて得失合点したことも、ふと変つたこ

とに出合へばうろつく様になり、後ではこゝはかふしたれば良かったにと云様にありたがる。そふ云ことなしに、わざも義理も其の場なりの自然に自由に回るが慮ぞ。そふあるから能く得られたもの。

鶴山は「得は学者一生の目あて」である、と言う。学問をする以上は、その学んだ内容を日常生活において自由自在に応用でき、したがってそこには何の後悔もないというような境地に到って、はじめて学問の成果が本当に自分のものになった、と言えるのである。

ここであらためて私自身の日々の生活を振り返ってみると、まさにそれは「あの時はこうすれば良かった」という後悔の連続である、と気づかされる。もつとも、学問らしい学問をしてこなかったのだから、当然と言えば当然であるが、いつまでもそのような状態にとどまっているようでは、いくら時間を費やしたとしてもその甲斐がないものである。

以上のように考えれば、今回の冒頭に掲げた文章の中でも、特に大事なのは最初の「知止」と、最後の「能得」とである、ということがわかる。

此段をせんぎつめてみた時、「知止能得」二つよりない。先づ事物の筋目をみかいて筋々知らねば、身のものにならぶ様はない。それがどれほどみかけても、身が其のなりにならねば、みがいた甲斐はないぞ。それで知と得との両端につまづてをる。さて此の両端より外はないが、其の間に定静安慮の階級を歴ねば得られぬぞ。さればとて今年一つ、来年一つ歴るではない、皆一時のことぞ。

この段の内容を煎じ詰めれば、「知止」と「能得」との二つに集約される、と鶴山は言う。ただし、「能得」の境地に達するまでの間を詳しく言えば、そこには「定静安慮」という四つの状態が含まれている、ということになる。定と慮については粗々触れたので、最後に「静安」についても言及しておきたい。

現代では「安静」という熟語もあるように、静と安とは同じような意味合いに聞こえるが、朱子学では両者を区別して考える。朱註には、「静とは心の妄りに動かざるを謂ひ、安とは處る所にして安きを謂ふ」(静謂心不妄動、安謂所處而安)と

あるが、要するに「静」の方は心の次元の話であり、対する「安」は自身の置かれた境遇をも考慮に入れた概念である、と言うことができよう。すなわち、平穩無事のときに心に妄念が無く、何か事があつたときにも落ち着いていられる、ということが「能得」の大前提になっているわけである。

## 農を通して読む論語

今村 亮太

自分は半年の農士の生活を通して、様々な古典の意味を少しずつ実感的に解せるようになってきました。その中でも特に、論語の学而第一の六章「子の曰わく弟子、入りては則ち孝、出でては則ち弟、慎みて信あり、汎く衆を愛して仁に親しみ、行いて余力あれば、即ち以て文を学ぶ。」この章を拳拳服膺しながら、日々農に取り組んでいます。出でては則ち弟、慎みて信ありという部分は今の自分にとって大切にしているところです。農の仕事は、作業そのものは簡易的なものが多く、一年目の自分でもできる作業が多くあります。逆に言えば、作業の動きの中に経験の差が付きにくいという事です。慣れてくると、自分の性格がやり方に現れてきます。現れてくると、他人のやり方が違うところが気になったり、自分のやり方というものをしたくなってしまうです。当然自分のやり方でなく、先輩方のやり方を真似しようと気を付けながらやっています。社会人だとあたりまえのように感じるかもしれませんが、この章は本来もっと深さや重さのある章だと思いました。現代ではこういった違いからの不和でも、他の場所で働けるという考えられていることが多いと思います。お金を稼ぐ手段が生きていることの本体にあるのです。しかし、孔子の時代や農を本とする生き方、家族・一族でやっていく農では、孝や弟が本体にあつたはずで、他人でさえ仕事をさせていて気になるのですから、家族であればもつとあわしろこうしろ言いたくなるに違いないはずで、そんな心を戒めて、和を尊しとしていく、孝悌になるということは、現代の我々が思っている以上に大切に難しいことだったのだと思います。自分もこれから家族で農業を志す身として、さらなる心の練磨、人間力の向上が必要だと感じています。日本人が世界に誇ってきた人間力は、こういった農を共にする生活の中で培われてきたのだと思います。物価高騰、食料危機が叫ばれている現代で、農に注目が集まっていると思います。しかし、日本に農を取り戻していくことは、日本人の道義心を取り戻していくことにもつながると思えました。これからも、古典と農を通して、自分を練磨していきたいと思えます。

## とよくも農園だより

季節は廻り、農作業中にも涼しい風が吹くようになりました。これからはいよいよ本格的な晩生のお米の手刈り収穫・稲木干しが始まります。そんな季節の変わり目に、会長・三浦夏南の長女、桃子が誕生しました。広島にある自然分娩の出来る病院の近くに、臨月から移動して待機していました。無事元気な女の子が誕生し、先日愛媛に戻り、氏神様にお礼参りのご挨拶をしたところです。現在はよく飲む長女の授乳とおむつ替えに追われる、幸せな毎日を送っています。上の子供達四人も歓迎し、毎日張り切ってお世話をしてくれています。三浦家の繁栄に必要な子供達が次々に産まれ、すくすくと成長していくことは喜ばしい限りです。

農業では、今秋から新たな取り組みを多数始めました。まず、親戚が本格的に農業を手伝ってくれることとなりました。九月から里芋の収穫が始まり、地元の農家さんの里芋を代わりに収穫することとなったのですが、退職した親戚と一緒に収穫することを行ってあります。アスパラガスも、別の親戚が兼業農家となり、毎朝晩収穫をしてくれることになりました。今後はできるだけ親戚も一緒に、一族で協力して農に励んでいきたいと思っています。

また、「農暮らし」と名付けて農業イベントの開催も始めました。月一回程度集まり、農業初心者に対して、秋野菜の畝立て、種まき、間引き・草管理を体



三浦 美恵



験してもらいました。親戚も含めて多数の方が参加し、現在は野菜の収穫を楽しみに、自分達の立てた畝で野菜の手入れをしているようです。

さらに、長男の本格的な鍛錬も始めました。今秋で六歳となり、来年から小学校就学対象となる長男は、毎日古事記・論語の素読、万葉集の朗誦、その他偉人の文章暗唱、万葉集の書き写し、そろばん、童謡、鍬ふり、ランニング、武道、掃除、お手伝いを行います。今までも行っていましたがいよいよ本



格的に開始しました。大人が手分けて教え、毎日少しずつ鍛錬しています。何でもお兄さんの真似をする子ども達は、長男の日々の鍛錬も横で見守っているので、下には自然と浸透していく事でしょう。

現状は目まぐるしく変化し、一年後が読めない現在。現状に目を向けると不安と絶望ばかりですが、それに一喜一憂することなく日々の学問・農業・子育てに励み、どんな状況下でも一族で団結していける地道な鍛錬を、息子とともにしようと気持ちを新たにしました。

### ★一燈照偶 万燈照国

ひの心を継ぐ会は竹葉秀雄・近藤美佐子両先生の精神を継承し、発展させることを目的として生まれた会です。一人の「ひ」の精神が周囲の人々の心に「ひ」を燈し、やがてそれが国を照らす「ひ」になることを願い、活動を行っております。皆様には何卒ご理解とご支援を賜りますよう、宜しくお願ひ申し上げます。

### ★年会費

一般会員	三千元
賛助会員	一万元
特別賛助会員	三万円
支援会員	一万円

### ★振込口座

愛媛銀行 普通預金 本町支店  
 口座番号 六一四二七三五  
 『ひの心を継ぐ会』